

企画名：実践から考える看護技術研究会
実施日：第1回 6月20日
企画実施組織：名城一枝・安里葉子・伊波弘幸・長嶺絵里子
<p>企画の目的・概要</p> <p>看護の実践現場において対象に即した確かな看護技術を提供することは、質の高い看護を行なう上で不可欠である。実践現場では条件の異なる場や対象に合わせて看護技術を適用することが求められるが、その能力の獲得は個々の看護者の努力に委ねられているのが現状である。一方、教育現場においては、学生の看護技術習得レベルの低下や臨地実習での実践体験の困難さが指摘されている。この問題解決のために実践現場と教育現場の双方が協力して取り組むことが必要と考える。</p>
<p>企画実施報告</p> <p>臨床現場と教育現場をつなぐ研究会としたいことから、臨床現場における看護技術の問題点、或いは技術の確認の場として活動を続けたい。年間を通して行われる4回の企画の課題について、話し合った。まずは、主旨を念頭に其々の参加者が臨床現場に対して話題提供したい項目を今回は取り上げた。(参加者：4名)</p>
<p>企画の実施評価</p> <p>今回、企画運営した項目はどれもテーマとしては興味を感じさせるものであったと考える。ただ、企画運営する際、臨床現場の方々が参加しやすい日程はいつか(看護協会の勉強会との重なりなどを避ける)、臨床現場の興味関心は何か等を探って、ニーズを捉えた企画にする必要がある。</p>

<p>企画名：実践から考える看護技術研究会</p> <p>第2回 爪切り</p>
実施日：8月22日
講師：名城一枝(名桜大学健康人間学部看護学科)
企画実施組織：名城一枝・安里葉子・長嶺絵里子
<p>企画の目的・概要</p> <p>看護の実践現場において対象に即した確かな看護技術を提供することは、質の高い看護を行なう上で不可欠である。実践現場では条件の異なる場や対象に合わせて看護技術を適用することが求められるが、その能力の獲得は個々の看護者の努力に委ねられているのが現状である。一方、教育現場においては、学生の看護技術習得レベルの低下や臨地実習での実践体験の困難さが指摘されている。この問題解決のために実践現場と教育現場の双方が協力して取り組むことが必要と考える。</p>
<p>企画実施報告</p> <p>第2回看護技術研究会では「爪切り」をテーマに話し合った。検討会で用いられた資料は、九州大学刑事判例研究会で用いられた「看護師の爪切りの正当業務行為性が争われた事案(平成21年障害被告事件)」である。この資料における検討方法としては、①被告人の行為が障害罪の構成要件に該当するか、②正当業務行為として違法性が阻却されるかについて、被告人を有罪にした第一審と、逆転無罪の判断をした控訴審の判決を比較しながら検討されていた。(参加者：3名)</p>
<p>企画の実施評価</p> <p>患者の「爪切り」は日常生活援助の一環として考えられていた。今回、看護師の「爪切り」事故が、裁判にもなるような事態が起こったことから、これまで、患者の「爪切り」は看護業務として当然のことと考えていたが、今後、どのように考えたらよいのか、結論を見いだせないままに終わった。次年度も引き続き検討したい。</p>

企画名：実践から考える看護技術研究会

第3回 エンゼルケアとエンゼルメイクについて

講師：伊波弘幸（名桜大学人間健康学部看護学科）

企画実施組織：名城一枝・安里葉子・伊波弘幸

企画の目的・概要（企画の目的と概要を正確かつ簡潔に説明して下さい。）

看護師にとって、亡くなった患者へ最後の看護援助は死後のケアであると言える。患者の死後のケアは、身体を清め、死によっておこる概観の変化を目立たないようにし、美しい姿で丁寧に送る。死後のケアは、病原菌の飛散を防ぐ、体液や排泄物の流出による汚染を防止する目的がある。すなわち臨終後、患者を天国に送るための重要なケアであると考えられる。また、死後のケアは、単に患者の容姿を整えるだけでなく、患者の生きてきた苦闘の歴史、これまでの生き様などを理解しながら看護師としての最後のケアであることも考えなければならない。

今回の企画では、臨床現場の看護師を交え、亡くなった患者への最後の看護援助であるエンゼルケアとエンゼルメイクについてについて、フリーディスカッションを行い今後のケアに繋げていくことを目的とした。

企画実施報告(参加人数等を明記)

今回の企画では、臨床の看護師の参加はなく、当学科3名の教員の参加のみであった。進め方としてパワーポイントによるプレゼンテーションを行った。内容は3項目に分け、1.エンゼルケアとエンゼルメイクの意味を考える。2.エンゼルケアの実際について説明した。その後、参加者とエンゼルケアについて臨床現場で各人が実際体験したことや意識して実践していたこと、また大切にしていたことなどフリーディスカッションを行った。（参加者：3名）

企画の実施評価(ケアの質の向上、または大学および地域の貢献)

今回の参加が少なかったことは企画の案内不足であった。次回から企画ポスター等も作成し臨床現場の看護師が一人でも多く参加できるようにしていきたい。

今後の取組み(本企画について、今後どのように発展するかを具体的に記入してください。)

エンゼルケア、エンゼルメイクは、看護師にとって亡くなった患者へ最後の看護援助であるため、今後の企画では実際のエンゼルケア、エンゼルメイクで使用するケア用品を準備し、方法論的な学習を取り入れていきたい。また実際、看護師らが臨床現場で困っていることや課題になっていることなど緩和ケア認定看護師等と連携しながら問題解決できるような企画運営を行い、臨終後の患者のケアの質の向上に繋げていけるようにしたい。

<p>企画名：実践から考える看護技術研究会 第4回 注射の固定</p>
<p>実施日：10月31日</p>
<p>講師：安里葉子（名桜大学人間健康学部看護学科）</p>
<p>企画実施組織：名城一枝・安里葉子・長嶺絵里子</p>
<p>企画の目的・概要</p> <p>看護の実践現場において対象に即した確かな看護技術を提供することは、質の高い看護を行なう上で不可欠である。実践現場では条件の異なる場や対象に合わせて看護技術を適用することが求められるが、その能力の獲得は個々の看護者の努力に委ねられているのが現状である。一方、教育現場においては、学生の看護技術習得レベルの低下や臨地実習での実践体験の困難さが指摘されている。この問題解決のために実践現場と教育現場の双方が協力して取り組むことが必要と考える。</p>
<p>企画実施報告</p> <p>留置針の固定には様々な素材のテープやドレッシング材が使用されている。今回の特に子どもの留置針の固定方法について子どもに負担が少なく、安全な留置針の固定方法について、テープの素材、刺入部位のテープの貼り方、留置針と延長チューブの固定方法、シーネの素材、刺入部の四肢末端とシーネの固定方法など、説明した。子どもにとっての安全な留置針の固定方法と注射固定に関連する皮膚トラブルについて説明した。また、シーネ固定をしない方法についての取り組みの文献について提示した。（参加者：3名）</p>
<p>企画の実施評価</p> <p>参加者が少ないことから、今後は臨床現場の参加を増やして行く工夫が必要である。</p>
<p>今後の取り組み</p> <p>より実践的な方法としての注射固定に必要な物品の素材の提示と方法を考えたい。</p>

<p>企画名：実践から考える看護技術研究会 第5回 口腔ケア</p>
<p>実施日：平成27年2月6日</p>
<p>講師：長嶺絵里子・安里葉子（名桜大学人間健康学部看護学科）</p>
<p>企画実施組織：名城一枝・長嶺絵里子・安里葉子</p>
<p>企画の目的・概要</p> <p>看護の実践現場において対象に即した確かな看護技術を提供することは、質の高い看護を行なう上で不可欠である。実践現場では条件の異なる場や対象に合わせて看護技術を適用することが求められるが、その能力の獲得は個々の看護者の努力に委ねられているのが現状である。一方、教育現場においては、学生の看護技術習得レベルの低下や臨地実習での実践体験の困難さが指摘されている。この問題解決のために実践現場と教育現場の双方が協力して取り組むことが必要と考える。</p>
<p>企画実施報告</p> <p>口腔ケアの意義と口腔ケア用品の選択、口腔ケアのポイントについての説明と歯周病に関連した疾患についてのビデオを視聴し、参加者の臨床現場での口腔ケアの実際と疑問点を情報共有し、口腔ケアの重要性について共通理解した。また看護基礎教育での技術演習の方法と基本的な技術のポイントについて説明した。先進的に口腔ケアを医師、歯科衛生士、管理栄養士、理学療法士、言語療法士、看護師などの専門職者で構成されている口腔ケア・摂食嚥下サポートチームを立ち上げチームで取り組んでいる病院を紹介した。参加者から現場での口腔ケアの実際とよりケアの充実させてくための取り組みについて問題提起がありディスカッションすることができた。口腔ケアは子どもから高齢者まで日常的に行われていることであり、「8020運動」の意義や自己の口腔ケアの重要性を再認識することができた。（参加者：5名 臨床現場2名）</p>
<p>企画の実施評価</p> <p>臨床現場からの参加者は2名あり、より実践的なケアについて情報共有できた。</p> <p>口腔ケアの先進的な取り組みの病院の実際を情報提供することで、現場での取り組みの参考にすることができたと評価を得られた。</p>
<p>今後の取り組み</p> <p>臨床現場でのケアの現状と疑問点について、研究会での技術の再確認や新しい取り組みの方法を情報共有することで、看護技術の質の向上につながることからさらに継続していくとは必要である。</p>